
昨日の空

かみたか さち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昨日の空

【Nコード】

N3641T

【作者名】

かみたか さち

【あらすじ】

テニスイベントのための男女混合ペアが発表された。理人は、かねてからひそかに好意を抱いていた佐倉とダブルスを組むことに。しかし、直前に平常理人とダブルスを組んでいる正木と佐倉が付き合っていることを知った理人は、ふたりの前でどうふるまっているのか分からなくなる。佐倉への想いを抱えながら、理人は悩むことに。

『0チヨコ』続編

（前書き）

* 飲酒は20歳を過ぎてからにしましょう。

* 未成年者への飲酒の勧めは、しないようにしましょう。

——テニス部の正木君と佐倉さんって、付き合ってたってえ
よりによって、と瀬尾理人は思った。つくづく、タイミンクの悪
さを呪いたくなる。手にした用紙には、ミックスダブルスのペアが
印字されていた。今月末に市の主催で行われるイベント用に、理人
たちの顧問が選手の实力と癖を考慮した組み合わせ。理人は、佐倉
未来とペアだった。

これが、女子生徒の色めきだった噂を小耳にはさむ前だったなら、
どんなに嬉しかったことだろう。入部以来気になっていた佐倉との
ペア。彼女の気をひきたいがために、同級生ながら熟練したプレー
をみせる正木に追いつこうと、ひそかに猛特訓してここまで来たとい
うのに。

用紙の角をそろえて丁寧に二つ折りにしながら、理人は重い息を
吐いた。

正木と佐倉は幼馴染み。家もマンションの隣り同士という。所詮、
高校入学して二年と少ししか知りあっていない理人に勝ち目はない
のか。手にしたラケットの入ったケースと鞆が重い。

「せーお。帰ろうぜ」

能天気な正木の声に、理人の手が滑った。鞆がゴトリと床に落ち
る。正木は驚いて駆け寄った

「おい、大丈夫か？」

「あ、うん。ありがとう」

屈みこむ理人の頬に、癖のない短い髪がさらりとかかる。怪訝な
表情の正木が、立ちあがった理人の顔をうかがった。

「顔色、よくないんじゃない？」

「あは。そう？ 今日の練習、先生リキ入ってたね。ただのイベン
ト試合なのに」

努めて明るく、いつも通りの反応を試みる理人に正木は、まあな、

と部室のドアを開けた。

「プロになった恩師が、名誉市民とやらに選ばれたお祝いだからってなあ。なにも受験生をかりださなくてもいいようなもんだけど」

「そだね。プロの選手と同じコートに立てるのは、面白そうだけど」
初夏の夕方は、薄オレンジ色のもやを空一面に広げ、むっとした熱気を、涼風が遠慮がちにかき分ける。

女子の部室前では、佐倉がまだ明るい空を見上げて待っていた。理人の胸が痛む。

同じ部活で同じ駅まで歩いて帰る。二年間何気なく続いていた日常が、重苦しくのしかかってくる。

「あれ？ 瀬尾君、疲れた？」

佐倉もまた、理人の様子の変化に気がついたのか、少し癖のあるショートヘアの頭を傾けた。理人が答える前に、正木がにやりと笑う。

「み…佐倉がミックスでロクな動きしないから、瀬尾はカバーに変なんじゃない？」

とたんに、佐倉の頬がプツと膨れた。

「だれかさんよりましだと思っけどお。相当にペアを走らせてたよっただけど？」

「いや、佐倉の方が瀬尾を振り回してた」

半ばムキになって言い合うふたり。悪口合戦と言えるやりとりも彼らがやると、からりと後腐れのない清々しさがあり、逆に強い親愛の情がにじみ出ているようだ。理人はあいまいになだめながらも、苦しかった。

今、自分は昨日と同じように笑えているだろうか。

ふと、そんな思いがよぎる。また、自分がこれだけ苦しい思いをしているのに、目の前の二人は何も知らずふざけ合い、笑顔をまきちらしている。妙に悔しさが湧き出で、理人は鞆を肩にかけ直した。

二人の間柄を知ってしまったことを、彼らは知らないのか。今までの佐倉に対する恋情に、気が付いていないのか。全て知った上で

気を使われているのか。

駅は、容易に近付かない。息苦しさに理人は、通りがかりの書店の前で足をとめた。

「あ、僕、ちよつと寄つて行きたいから、先帰つてて」

これで少しは楽になれる。書店に逃げ込もうとする理人に、佐倉が、

「あ、私も」

と追隨した。正木が彼女の頭をつついた。

「漫画か？ たまには勉強もしろよ」

「違つて。この前、近くの店で見つからなかったのがあるの。ここならありそうじゃない？」

語尾で、理人に同意を求めてくる。昨日までなら、そうだね、と目を細められたのに、頬がひきつてしまう。

どうしてどうして。

理人は内心歯がみをして、二人が足を向けたのとは別方向の雑誌コーナーへ進んだ。どうして佐倉は、昨日までの間にその笑顔を自分に向けてくれなかったのか。

適当に、平積みされた表紙群の上に視線を滑らせていく。特に目当てのものがあつて書店に入ったわけではない。三人で居る時間を打ち切りたかつたのに、逆に延ばしてしまった失策に、理人は自身を責めた。

イライラとラケットケースを背負いなおす理人は、隣りに立つ人の気配に、一步体をずらした。

「こんなところに理人つて、珍しいじゃん」

いきなりかけられた言葉に、理人は飛びのいた。目の前に、まだ折り目が崩れていない他校の制服を着た小柄な男子生徒が、やや鋭い目つきで立っている。

書架を回つてきた正木たちもそれに気がつき、あからさまに好奇の目を向けた。

「へえ。瀬尾の知りあい？」

「あ、その」

くちごもる理人を遮るように、男子生徒はすばやく正木と佐倉の持つテニスラケットに目を止め、頭を下げた。

「いつも兄がお世話になります」

瀬尾隼人がそう言つて人懐っこく笑うと、確かに目元は理人によく似ていた。

「正木サンと佐倉サンでしょ。理人がよく、うちで話してくれるけど」

呆氣にとられる正木の隣りで、佐倉がポンと手を打った。

「ひよつとして、あの、中学陸上全国大会に出た子？」

「知ってるの？」

虚をつかれた理人は思わず呟いた。佐倉が嬉しそうに頷く。

「おとしだっけ？ 地方紙に載つてたじゃん。瀬尾つて名字、この辺に少ないし、下の名前もなんか似てたし。私最初、瀬尾君かと思つてびつくりしちゃったもん」

「って、そんなときはもう俺達、高校入つてるだろ。なんで中学なんだよ」

正木の横やりに、佐倉がむつと口を閉じる。

理人は、目の奥がきゅ、と締め付けられて顔をそらせた。

似ている名前を見ただけで、佐倉は自分のことに思いをはせてくれていた。なのに、喜べない。

氣を取り直して笑顔を作ろうと顔をあげた理人は、一瞬正木が自分に憐みの視線を向けていたのに氣が付いた。

バレてる？

正木は無頓着なようでありげなく氣配りをする男だと、二年間ダブルスを組んでいてよく分かっている。

知っていて、知らないふりをしているのか。苛立ちがこみ上げ、直後に言いようのない悲しみが押し寄せた。思えば、正木と佐倉が交際を始めたのは去年のバレンタインからだと言う。それまでずっと、毎日のように二人と通学を共にしながら氣が付かない方がよほ

ど間抜けだ。正木に怒りを抱くのは、お門違いだ。

佐倉の無邪気な声が、理人を現実に取り戻した。

「ね、それ陸上関係の雑誌でしょ？　すごい。全国出ても、タイムアップ目指して研究してんだね」

「佐倉さん」

口を開きかけた理人の前に、さりげなく隼人が動いた。

「ま、そんなとこ。じゃ、俺、カノジョ待たせてっから、先に失礼します」

右脇に雑誌を抱えレジへ向かう隼人に、色めきだった佐倉が小声で、

「え、え？　弟くん、カノジョいるんだあ。お兄ちゃん、先こされちゃってない？」

と囁く。泣きつ面に蜂。頭の上に岩が落ちて来た衝撃を感じ、理人は言葉をなくした。

カウンターに雑誌を置いて、右手でポケットを探り小銭を払う隼人の後ろ姿がかすむようだ。

失恋相手に、未だカノジョがないことを指摘されるなど。女子部員が熱い視線を向ける、理人お得意のさわやか笑顔も凍りつく。そもそも、その笑顔も佐倉ひとりに向けていたはずなのに。

佐倉を盗み見ると、彼女はわずかに眉をひそめて隼人を見送り、考え深げに髪を耳にかけた。

理人の好きな仕草を、どうしてまた、ここですか。泣きそうになる理人に、佐倉が息をついた。

「弟くんって、瀬尾君とイメージ違うね」

「どんなとこが？」

しどろもどろに聞く理人に、佐倉は制服の裾を指先でつまんだ。何かを考えているときの彼女の癖だ。そのようなことも、理人は知っている。

「さっき、ポケットに直にお金いれてたじゃない？　瀬尾君だったら、一円玉一個でも絶対に直に入れないじゃない。そのへんの感覚

というか」

「ああ、あれ、ね」

別の意味で、理人の胸に針がささる。隼人の部屋にならぶ、欠けたりひびが入ったりしたトロフィーや接着テープで補修された賞状が脳裏を横切る。

「彼、左手が動かせないんだ」

驚きに息をのむ佐倉と正木の気配を、理人は背中を感じながら続けた。

「去年、全国大会前に交通事故に遭って、左手が振れなくなった。だから、今はもう走ってないんだ、あいつ」

「…ごめん」

佐倉の目に、たちまち涙があふれる。いいよ、と言いき置き、さすがに理人は黙ってそのまま店を出た。窓ガラス越しにちらりと見た、正木が佐倉の髪をなでて慰める姿が目には焼きつく。

残像を抱えたまま、理人は自分の部屋の床に寝転がって天井を見ている。

佐倉が泣いているところを、初めて見た。

明るく勝気で、どこかボーイッシュな佐倉が涙を流すなど、思ってもみなかった。想像以上に優しいのだと思う一方、正木にとってその涙は何度目のものだったのかと嫉妬を覚える。

理人は、腕で目元を覆った。明日から、どのように彼らに接したらいいのだろう。佐倉のことは、今でも好きなのに。正木のこと、テニスをする者として憧れているのに。

「理人お」

申し訳程度のノックの後、返答を許さない間合いで隼人が顔を出した。

「メシ、食わないの？」

「うん…」

床がきしみ、隣りから石鹸の香りが漂う。風呂上がりにざっくりとスウェットを着た隼人が傍に座り込み、満足げな息を吐く。

「飲む？」

ひやりと首筋に当てられた缶に目を向けると、理人は眉をひそめた。

「また、父さんのビールくすねたのか？」

「人聞き悪いなあ」

悪びれる様子もなく、隼人は床に置いた缶のプルタブを片手で引き上げた。

「理人が凹んでるって言ったら、親父から黙って差し出されたの」

「未成年を慰めるのに、酒を使うわけ？」

「そーいう人じゃん」

ぐつと一息にあおった隼人が、無造作に口元を袖で拭いながら理人を見下ろした。

「コーラならあったけど、そっち持ってこうか？」

「要らない。風呂は朝入るから、ちよつと寝かせてくれ。特別にペアが変わったから、慣れるまでしんどいんだ」

邪険に言い放つ理人に、隼人は空になった缶を置いて代わりに何か拾い上げたようだ。かさり、と乾いた音がする。

「ふーん」

意味深な声に、理人は隼人の手の内にある紙をみて跳ね起きた。

「勝手に…」

奪い返そうとする理人の手をかわし、隼人は理人の額に、ベツと紙を押し当てた。

「りつくん、そりゃ辛いなあ。よりによって失恋の相手とペアじゃ」

さめざめと泣き崩れる仕草をしながら、明らかに隼人の口ぶりに、からかいがこめられている。

「ハヤ」

「佐倉サンのこと話す理人、むっちゃ嬉しそうだったもんな。こう、周りにキラキラって光の粉が飛んでるような」

「おい」

「ここはさ、さっぱり諦めちゃいなよ。佐倉サンと正木サン、理人

の入る隙間ないよ、あれは」

クツと喉を鳴らす隼人の笑いに、理人は弟相手とあって怒りを隠すことをしなかった。

「未だに陸上諦められないでいるお前に言われたくない！」

隼人の目に、鋭い光がさした。だが、理人も止まらなかった。

「お前だって、陸上諦めてないんだろ。だったら、監督だって引きとめてくれてたんだからやってみりゃ良かったじゃないか。治るって見込んで、高校推薦だってもらったのを蹴ることなかったろ！そのくせあれだけ僕たちも巻き込んで騒ぎ起こしたのに、毎日走りに行ったり陸上雑誌買ったりして、諦めてないのはお前も同じじゃないか！」

生々しく蘇る。去年、隣の隼人の部屋から聞こえるただならぬい音に開けた扉の向こうの光景。整然と並んでいたトロフィーが床や壁に打ち付けられ、賞状を引き裂いたクラフトナイフの刃先は隼人の左腕から流れる血に汚れていた。リハビリをしても思うようには治らない左腕に対する、鬱積した思いを爆発させていた弟の姿。

隼人が落ち着いてからも、家族間で事件に触れないことが暗黙の了解となっていた。だが、やり場のない理人の苛立ちは彼の理性を脇に追いやり、隼人の傷に刃を向けてしまった。

持ち前の生真面目さが理人をすぐに後悔させたが、当の隼人に反撃の色はなかった。

「好きだからね、走るの」

隼人は、ぼそりと言った後、一転して明るく笑った。いや、目だけは、射抜くような強さを持って理人に向かってている。

「好きでいたいから、諦めてるよ」

「え？」

「諦めてるよ。前みたいに走れないってことは」

アルコールが回って暑くなったのか、隼人は左袖をまくった。無意識の行動だが、自ら切りつけた痕が暗く浮かぶ。

「どんなにがんばっても、あの頃と同じにはなれないじゃん。元通

りにならないって諦めたから、今の自分なりの走りで満足できてるんだけど？ でなきゃ、とつくに陸上、嫌いになってると思うな」
呆然と立ち尽くす理人に断り、隼人は隣りの部屋から今日購入した雑誌を持ってきた。

「これ」

「コーチング？」

「うん。走れなくてもさ、指導は出来るだろ？ もし走ること自体を続けてたら、前と同じようにタイム出そうとしたと思うよ。けど、無理じゃん。だったら、新しい付き合い方した方がいいって」
そう、か。

理人は、しわだらけになったミックスのペア表へ目を落とした。
新しい向き合い方。佐倉と正木との新しい関係性。

「少しは落ち着いた？」

ビールの空き缶をもてあそび、隼人が悪戯っぽく笑った。

「理人、俺みたいに発散させないで内に貯めこんじゃうからさ。そちのほう怖いし、佐倉サンも正木サンも気まずいじゃん。理人王子サマの魅力激減だぞ」

少しからかい過ぎて悪かったけど、と付け足した隼人が立ちあがる。缶をくわえて脇に雑誌をはさみドアへ手をかける弟に、理人は問いかけた。

「僕は佐倉さんのこと、好きでい続けていいんだよね？」

隼人の目が笑った。くわえた缶を手につつすと、

「ま、失恋の痛みに浸りたいなら、そんなときは、心中以外なら付き合ってやるよ。カラオケなり酒なり、おごつてよ」

「なんで僕がおごらなきゃなんないわけ？ 普通そう言うとき、慰める方が出してくれるんじゃないか？」

「あ、そっかそっか。んじゃ、バイト探しくよ」

高らかに笑う弟に、理人は丸めたペア表を投げつけた。ひと足先に閉まった扉に当たった紙クズは、クシャリと音をたてて転がった。拾い上げた手の中の名前達は、呆気ないほどに軽かった。

好天に恵まれたイベントは無事終わった。

部室でプロ相手の交流試合の感想をあれこれ言い合いながら着替える際、正木のリストバンドが理人の足元にこぼれ落ちた。

拾いあげた時、内側に佐倉の名前を見つけ、理人は思わず手を止めた。そういえば、バレンタイン以降である、正木がこれを使いだしたのは。

「あ、悪い」

憔悴を隠すように受け取る手を出す正木に、理人は何気ないように言った。

「そう言えば正木君って、佐倉さんと付き合ってるんだって？」

ごくりと動く正木の喉仏を見ながら、理人は早まる鼓動を押し殺した。

「そうならそうと、言ってくれたらいいのに。水臭いなあ」

「あー。うん、なんかタイミングはずしちゃってさあ」

「言っとくけど」

理人は、汗と泥のついたユニフォームを鞆に押し込んだ。

「知ってると思うけど、僕も佐倉さんのこと好きだからね。泣かしたりしたら、承知しないよ」

「うわ」

正木が、あからさまに顔をしかめた。

「そう来るか」

鼓動の早さを誤魔化すように、理人はいつもよりゆったりと鞆のファスナーを閉める。が、指先は小さく震えていた。

思い切った宣戦布告が、吉と出るか凶とでるか。しかし、理人はこの方法で今までの三人での関係を敢えて壊し、新しい付き合い方を見つけたかった。

先に出口へ足を踏み出した正木がふり返った。その顔は、笑っていた。

「倦怠期にひたってる隙もないな。魅力的な男であり続ける努力を

しないと」

「あ、うん。僕も負けてないからね」

正木を追い越して、理人はドアを開けた。女子の部室前で、佐倉がこちらに向かつて手を振っている。

「佐倉さん、今日は特にキレが良かったね」

「そう？ 瀬尾君のフォローがあつたからだよ。正木チームも健闘してたわね」

「お、珍しいな、佐倉が俺を褒めるなんて。明日は雨かなあ、嵐かなあ」

「何それえ。じゃ、もう褒めてあげな―い」

「あは。僕なら、佐倉さんに褒められたら、すんごく嬉しいけどな」

「おい瀬尾。さり気にすり寄るんじゃないよ」

「あー、もお。ふたりともよく頑張りました！ね、打ち上げと称して、駅前のミスド寄つていこうよ。隼人君とカノジヨも呼んじやう？ 試合、見に来てくれてたよね」

「お、それいいね。瀬尾、弟くんもケータイ持ってんだろ？」

「えー。あいつ来るとうるさいから、やだよ」

良かった。

理人は笑いながら空を振り仰いだ。頭の上に広がる夕方の空は、相変わらず薄い温かな色のもやがかかったように霞み、まだ火照りを残す体をわずかばかりの涼風がなでる。

昨日の空の方が、綺麗だったかもしれない。けれど理人は、今見上げている空も好きになれそうな気がした。

(後書き)

感想おまちしております♪

←こちらもよろしく

サイト：かみ たからばこ

<http://www.plala.or.jp/kamittakarakoba/>

ブログもやっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3641t/>

昨日の空

2011年5月22日00時11分発行